
ホームズノート

Chiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホームズノート

【ニックネーム】

Z0601D

【作者名】

Chirō

【あらすじ】

ホームズを心の師とし、後輩の光伸をワトソンと呼ぶ、高校国語教師の富永あつし28歳。彼の宝物はホームズの解決したトリックを、全て書いた通称「ホームズノート」。そのノートを持って、今日も難事件に挑みに行くが……?

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。
実際の人物名や団体名とは関係ありません。

プロローグ

今日付けの新聞記事。
大きな見出しに書かれた文字は、

「平成ホームズ誕生！」

僕が読んでる記事は

「打った！ サヨナラホームラン！ ！」

僕の朝は実に優雅である。

目覚ましが鳴ると同時に目が覚め、

ベッドから起き上がりると、玄関へ向かい新聞を取る。

取ってきた新聞を、リビングにあるオープンキッチンのカウンターに置いて、パンを焼く。

パンを焼いている間に、卵を右の手で二つずつ割り、ボールに入れてとく。

といた卵を、あらかじめ油をひいて温めておいたフライパンに流し込み、

スクランブルエッグを作る。

パンが焼け、スクランブルエッグが出来たら、

オープンキッチンの前にあるテーブルに並べて、コーヒーを作る。

今日は肌寒いので、ホットコーヒーだ。

こうして、僕の朝食が始まるわけで……

僕は新聞を読みながら朝食を摂るのが日課でね。

今日は、たまたま開いたスポーツ面を読んでいる。

いつもなら、政治面を見ているのだが…。

少しばかり気になる記事を、見つけたからね。

まあ、それについては今度話すとしよう。

僕は基本的にはテレビより新聞派で、テレビはあるが、あまり見ないのだよ。

よって、最近のアイドルやら俳優やらはよく分からぬわけで、要するに、世間の波から激しく外れているのだ。

友人のワトソン君（本名は光伸君だが）には、そういうた面でよく世話になるわけで。

そういうえば、話は変わるが、ワトソン君はなんでも知っているのだよ。

特に、最近人気の出てきたアイドルグループや、歌手や役者、最近始まつたドラマなんかは、当たり前のようになつていてるな。そういうところは、僕にとって唯一の尊敬できる部分なのだ。だが、僕がワトソン君にそういうと、彼は決まってこういうのだ。

「ちよつと先輩……それ褒めてませんよ」

僕にしてみたら、とても立派だがな。

なんとも不思議なヤツだよ。

しかし、これでも僕の唯一の友人でね。

こんな変人の相手を出来るのは、彼しかいないのだよ。ちなみに僕の年齢を教えると、28歳でね。

ま、だからなんだつていうんだろうね。

あ、大事な事を忘れていた。

僕がなぜ、こんな公共の場に出てきたのかというとだね、
(実は田立つのはあまり好きじゃなくてね)

今日、僕が通う学校で(あ、教師なんだよ)、なにかが起こるらしいんだ。

さあ、なにが起こるのかは、僕にもワトソン君にもわからなくてね。
だから困っているんだよ。

だがしかし、僕にはこの頭脳があるからね。
なにが起っても大丈夫さ。これまでもちゃんと解決してきたから
ね。

ああー忘れていた。僕の大事なノートのことを。

僕が読んだ、ホームズ全集に出てくる全てのトリックを書いたノー
トのことさ。

これは僕の宝物でね。あまりに難問が出てくるとこれに頼ってしま
うのさ。

まあ、ホームズは僕の心の師だからね。

ああ、こりして説明ばかりじゃつまらないだろう。
すまないね。じゃあ、これから起きる事件を、
君たちと共に解いていこうではないか。

なあ、ワトソン君。そこにいるんだろう?

「……僕は光伸ですよ。」

まあ、いいじゃないか。

さ、本編だよ、ワトソン君。

君の物知りぶりを世間にさらすことができるではないか。

「…褒めてるわりに文章おかしくないですか?」

…君は結構ねちっこい男だな。ワトソン君はそんなヤツじゃなかつたぞ。

ま、僕のいうワトソン君はホームズのワトソンだがね。

「まったく…何処までも自由な人だ……」

第一ページ

キーンコーン カーンコーン…

8時30分の本鈴が校内に響き渡るころ、3年7組の教室のドアは遅刻ギリギリで走つてくる生徒でごつた返していた。生徒たちは我先にと言わんばかりに、バタバタと音を立てて教室に入り込む。

そんな生徒たちに入り混じり、明らかに20は超えた一人の男が透明の箱を抱えて入り込んできた。

キーンコーン カーンコーン…… プッシン…

「あーー！あっくん遅刻ーーー！」

「あっくん」と呼ばれたその男は、教室に入り教卓の前に立つと持つていた箱を教卓に置いた。

「君たち……仮にも僕は君たちの担任をやっているんだが？せめて『先生』をつけなさい、『先生』をひ！」

「えーー……でもその身長じゃーね…」

男の一言に生徒たちは動じもせず、好き勝手に騒ぎ始めた。

男の名前は、富永あつし。年齢28歳、国語教師。

28歳という年齢にしてはやや小さめな身長のせいか、生徒からは「あっくん」と呼ばれ、同僚の教師からは「変人」と言われ、

校内では（ある意味）名の通つた男である。

「……なんだ、金沢は休みなのか？」

教卓に置いた透明の箱から、出席簿を取り出して出席確認をしようと、金沢馨の席が空いてる」と云々が付き、誰に問うでもなくつぶやいた。

「さあ？ 知らねー」

教卓の前に座っていた一人の生徒が、富永の独り言に気付き、そう答えた。

「ふーん、富城も知らないのか……ま、いいか。高校3年にもなれば電話なんてしなくても大丈夫だろ？」

富永は小さくせりつぶやくと、持つていた出席簿で教卓をバシンッと叩いた。

「ほらー！ 席着いてー！ 授業始めるぞー！」

本日一発目の授業を始めようとしたとき、教室のドアを叩く音がした。

富永がドアを開けると、そこには数学教師『土井光伸』が立っていた。

「…先輩、ちょっと。」

どうも深刻そうな顔つきの土井を、富永はドアの外で待たせ、

生徒たちに、静かにしてろよ、と忠告して教室を出た。教室を出ると、突然土井が富永の腕を引っ張って走り出した。

「なに？！何処に行くんだ！！？」

「第一応接室です！！説明は後でしますからーー！」

土井の足の速さについて行けなくなつた富永は、半ば引きずられる格好で第一応接室へと急いだ。

コンコンッ…

僕らは応接室のドアを叩いた。

中からの返事を聞き、息を整えて静かにドアを開く。

中には校長と教頭、3年の学年主任そしてもう一人、顔をハンカチで押さえた女が、中央にあるソファーに向かいあわせで座っていた。

僕らが入ってきたことに気付くと、校長は立ち上がり、女はハンカチを膝元に下ろした。

「待っていましたよ、富永君。」

「……の方は？」

僕は校長に、その女に田を向けつぶやくよう聞いた。
校長は少し困ったように僕に言った。

「あ…………ちよっと困った事になつてね。の方は君のクラスの金沢くんのお母様ですか？」

「そうですか……。」

僕はとりあえず金沢母に軽くお辞儀をし、教頭らが座つてゐるソファーの隣に立つた。

「で？ どうして僕らは同じに呼ばれたんでしょうか？」

僕は校長がソファーに座ると同時にそう聞いた。
校長は重い口を開くように静かに話し始めた。

「…………実は金沢馨くんが、先週金曜日の夜コンビニに出かけたきり、
もう二日も家に帰つてないそなんだ。」

「……はあ……、家出かなんかじや……」

「……それが……」

僕の隣で立つっていた土井が突然口を挟んだ。

「それが、少し調べてみたんですが……近隣の高校でも似たような
事が起つてるらしくて……」

「……似たようなこと……？」

「はい。夜、家を出た子がそのまま帰つてこないんです」

「……高校生？」

「ええ。」

土井は静かに頷いた。

「……で、どうして僕がここに呼ばれたんですか？」

数分前に校長に聞いた事を、僕はもう一度言つた。

「あなたが、……以前勤務していた学校である事件を解いたと、聞いたことがあったからです……」

答えたのは、土井だつた。

「……ほお。あれ、ですか。」

僕は校長に手を向ける。

「確かに、あの事件は校外にはばれないよ」と関係者以外には何も話さなかつたのですが……。

校長先生は知つていらしたんですね。……それも、……こんな数学教師にまで……」

『あの事件』。

このことはまた後で話すとしよう。

今は色々と面倒だしね。

少しだけ、この話に出てくるけれど。

「で、この僕に解いて欲しい、と。まだ事件だとも決まっていないのここ?」

「……だつたら……だつたら馨はづ、理由もなく家を出て、理由もなく帰つて来ないって言うんですか?!」

突然ソファーから立ち上がり、手に持つっていたハンカチを握り締めて、金沢母が叫んだ。

さつきは気付かなかつたが、身長は僕よりも高く、土井より低い。スレンダーな体型の、俗に言つ、『モーテル体型』といつヤツだな。

僕は隣に立つている土井を見上げ、小さくため息をついた。

「…………やればいいんでしょう、やれば。」

土井は小さくガツツポーズをしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0601d/>

ホームズノート

2010年10月9日02時22分発行